

今週の為替相場見通し(2021年9月21日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.11 ~ 110.16	109.98	108.00 ~ 110.00
ユーロ	(ドル)		1.1724 ~ 1.1846	1.1726	1.1650 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		128.61 ~ 130.18	128.98	127.50 ~ 129.00
英ポンド	(ドル)		1.3727 ~ 1.3913	1.3727	1.3650 ~ 1.3800
(1英ポンド=)	(円)	*	150.83 ~ 152.85	151.11	150.00 ~ 152.00
豪ドル	(ドル)		0.7262 ~ 0.7376	0.7263	0.7120 ~ 0.7320
(1豪ドル=)	(円)	*	79.75 ~ 81.15	79.90	78.00 ~ 80.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 108.00 ~ 110.00 円

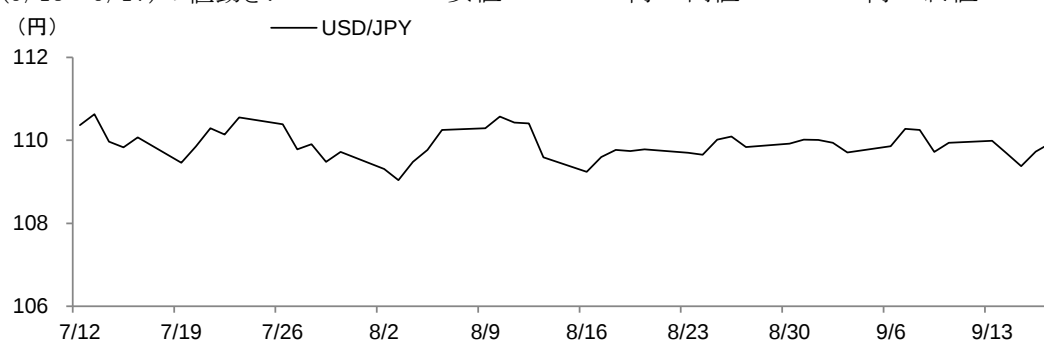
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週半ばに値を下げる展開となった。週初13日、109.90円付近でオープンしたドル/円は、日経平均株価の堅調推移にじり高となり、一時週高値の110.16円をつけた。14日、ドル/円は海外時間に米8月CPIの発表を控える中、110円付近で動意薄の展開となった。海外時間では米金利上昇に伴うドル買いから前日の高値に並ぶも、米8月CPIが市場予想を下回る結果となり、米株も軟調に推移したことでドル売りが加速し、109円台半ばまで急落した。15日、ドル/円は前日のドル売り地合いが継続してじり安となり、海外時間には一時週安値の109.11円まで続落したが、9月NY連銀製造業景気指数の結果が好調で米金利の上昇も相まって109円台半ばまで値を持ち直した。16日、ドル/円は上値の重い推移となったが、海外時間に入り、9月フィラデルフィア連銀景況指数の結果が好感され米金利が前日に続き上昇すると、109円台後半まで急反発した。週末17日のドル/円は、米金利上昇を受けたドル買いから一時110円台まで水準を切り上げる場面も見られた。しかし、米9月ミシガン大学消費者信頼感指数の結果が予想を下回ったことでドル買いは頭打ちとなり再び109円台後半に下落してクローズした。週初20日はリスクオフが優勢となり109円台前半まで水準を切り下げた。

今週のドル/円相場はFOMCの内容次第では下落すると予想している。先月のジャクソンホール会合におけるパウエルFRB議長の講演を受けて、今月のFOMCにてテーパリング開始の時期等が示される期待が一時的に盛り上がったが、月初に発表された米8月雇用統計が予想を大きく下回る結果を示したことを受けて、今月会合に金融政策変更の進展を期待する向きは少なくなったようだ。この為、今週のFOMC会合にてテーパリングの決定が行われないことに対しては大きなサプライズはないと考えているが、次回11月の会合でもテーパリングの発表がない可能性が示唆されると失望感がドル売りを招くと予想している。経済指標の芳しくない結果やコロナウィルス変異種の拡大、米債務上限問題による不透明感など、テーパリング開始の遅延を引き起こす火種は様々に存在している。今週は、22日(水)FOMC政策発表、米8月中古住宅販売、23日(木)シカゴ連銀全米活動指数、24日(金)米8月新築住宅販売件数の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/13~9/17)の値動き: 安値 109.11 円 高値 110.16 円 終値 109.98 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.1650 ~ 1.1800 127.50 ~ 129.00 円

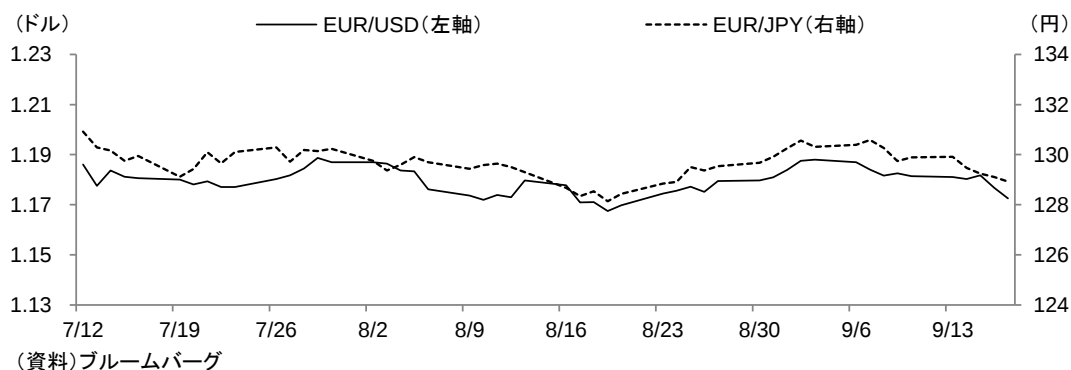
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは週後半に下落。週初13日、ユーロは1.1812レベルでオープン。中国当局が大きな決済会社に対して分割することを計画しているとの報道や、中国人民銀行のメンバーがテクノロジー企業の拡大をコントロールすべきとの発言を受け、リスク回避の動きが強まり、1.17台後半まで下落。一巡後は、リスク回避的な動きが後退し、また米金利低下に伴うドル売りも相俟って1.18台を回復。翌14日は、市場予想を下回る米8月CPIの結果を受け、ドル売りの展開となると週高値1.1846まで上昇。その後は株安を受けたクロス円の売りを背景にユーロの上値が抑えられ、1.18付近で上値重い推移。15日、ユーロ圏7月鉱工業生産の良好な結果に1.18台半ばまで上昇。その後は米金利の上昇などを背景にドル買い優勢となり、再び1.18付近まで押し戻された。16日、新規材料に乏しい中、1.18付近を推移していたが、海外時間に入り、良好な米経済指標や米金利上昇によるドル買いが強まると1.1751まで下落した。週末17日、海外時間に中国株が上昇したことでリスク許容度がやや拡大するとユーロは1.17台後半まで上昇。その後、米株の反落を背景にユーロ売り地合いとなると、週安値1.1724をつけ、1.1726レベルで越週した。

今週のユーロはレンジ推移を予想。欧米ともに金融緩和策の縮小を視野に入れる中、特に米金融政策の動向には注目が集まっている。先週はFOMC前(21日~22日開催)のブラックアウト期間中であり、米経済指標に手がかりを求めた結果、CPIの鈍化によるドル売りに始まり、その後、良好な小売売上高などを受けたドル買いにつられる格好で、ユーロは上下した。引き続き米金融政策に振られる展開を想定している。肝心のFOMCだが、大きなサプライズなく消化し、相場へのインパクトは小さいと考えている。パウエルFRB議長が雇用情勢に懸念を示す中、8月雇用統計は市場予想を大幅に下回る結果となっており、早期テーパリング開始の可能性は低い。一方で、生産や消費が堅調な中、年内テーパリング開始を延期するような状況でもなく、無難に消化するであろう。本邦もシルバーウィークに入中、その他、欧米圏で特段材料視されそうなイベントや指標も予定しておらず、小動きの展開を予想。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/13~9/17)の値動き: (対ドル) 安値 1.1724 高値 1.1846 終値 1.1726
(対円) 安値 128.61 高値 130.18 終値 128.98



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3650 ~ 1.3800 150.00 ~ 152.00 円

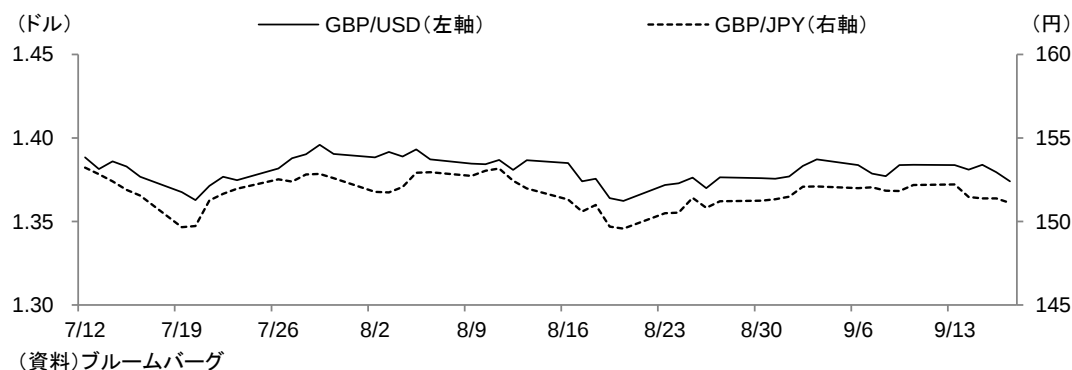
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、細かい上下動を経て、対ドル、対円では水準を小幅切り下げたものの、対ユーロでは概ね横ばいに終わったことから、対ドル、対円で下押しも、ドル、円の堅調の裏返しと考えられた。14日のポンド上昇は、米8月CPIの小幅下振れをきっかけに始まった。直後ドルは主要通貨に対して全面安に振れ、ポンドは対ドルだけでなく対円でも水準を切り上げたが、程なく、通貨市場は円全面高へと転じていった。この円買いは、リスク回避の動きと受け止められた。米CPI発表直後から、新興市場通貨全般は(対ドルでも)軟調に推移しており、米株も開場直後から明確に売り込まれた。円全面高は16日まで続き、米8月小売上高の上振れを受けて全面安に転じた。並行して、英固有の要因として、ジョンソン首相による内閣改造が関心を集めた。新閣僚の顔ぶれが発表されたのは15日のことだったが、14日の時点で、現地では確度の高い情報として、内閣改造が観測され始めていた。米軍(NATO合同軍)アフガン撤退の際の「失態」が批判を集めていたラブ外相の(司法相への)降格や、コロナ禍下での学校運営や(高校/大学)選抜試験を大きく迷走させたウィリアムソン教育大臣の更迭などは、足下低迷する支持率の回復を企図したジョンソン首相の失地回復策と受け止められたが、そもそも失地回復先を打たなければならないほど同首相が追い詰められていると解釈できた事実が、前後してポンドの重石になっていたのではなかろうか。英経済指標では、この間、強いインフレ圧力を示した英5~7月平均賃金(14日)や英8月CPI(15日)に対するポンドの反応が限定的だった一方、予想を大幅に下振れた英8月小売上高(17日)は、週引けに掛けて明確に進んだポンド安の背景になった可能性が考えられた。17日、英政府は、国外から英に入国(帰国)した人への制限措置を、来月から大幅に緩和する方針を示したが、ポンドが材料視した様子はほとんど読み取れなかった。

今週の英ポンド相場は、22日(水)に米連銀公開市場委員会、23日(木)に英中銀金融政策委員会の結果発表を控え、一連の重要イベントの結果待ちの膠着が先行する可能性が高いものと見込む。とりわけ、米連銀公開市場委員会は、資産購入ペースの減速(テーパリング)開始のタイミングが示されるか否かに市場の大きな関心が集まっており、様子見を決め込むのに十分な理由になろう。米8月雇用統計の予想外の下振れを受け、「9月決定」の可能性は遠退いたというのが市場の中心적인見方だが、仮に、決定自体は先送りになったとしても、声明やパウエル議長記者会見が、その前倒し、もしくは先送りを強く示唆するような内容になれば、前倒しにドル買い、先送りにドル売りと素直な反応が見込めるのではないかと。米連銀公開市場委員会と比較すると、市場全般の関心は低いものの、英中銀金融政策委員会も目先のポンド動向を占うには重要な注目材料。足下英物価関連指標の上振れ(上述)などを受け、「英中銀が緩和的な金融政策を縮小する」との見方は、市場の一部に確かに広がりつつある。ただし、それでも、近い将来の利上げはおろか、資産購入策縮小を見込む向きも現時点では限定的で、現実的には同時に発表される議事録などに将来の金融政策運営のヒントを求めるのがせいぜいと言えるだろう。金融緩和縮小を予想する見方が強まってきている分、中立的な結果に、ポンドが軟調に反応する可能性の方が、若干高いのではなかろうか。英国内の経済活動は、前述の英への入国規制緩和(旅行業/観光業などへの好材料)の他、レストランやナイトクラブまで含めたホスピタリティ産業が、既にほぼ以前の状態まで営業を再開した一方、長距離輸送トラックの運転手や農産物収穫のための人手不足などが物流に支障をきたしている。また、今月末に予定される一時帰休制度の終了による失業率の急上昇や、冬場に向けてコロナ禍再燃による営業禁止/外出制限などの行動制限措置の再発動(プランB)への警戒感も残り、英中銀も慎重な姿勢を維持する可能性が高いのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/13~9/17)の値動き: (対ドル) 安値 1.3727 高値 1.3913 終値 1.3727
(対円) 安値 150.83 高値 152.85 終値 151.11



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7120 ~ 0.7320 78.00 ~ 80.50 円

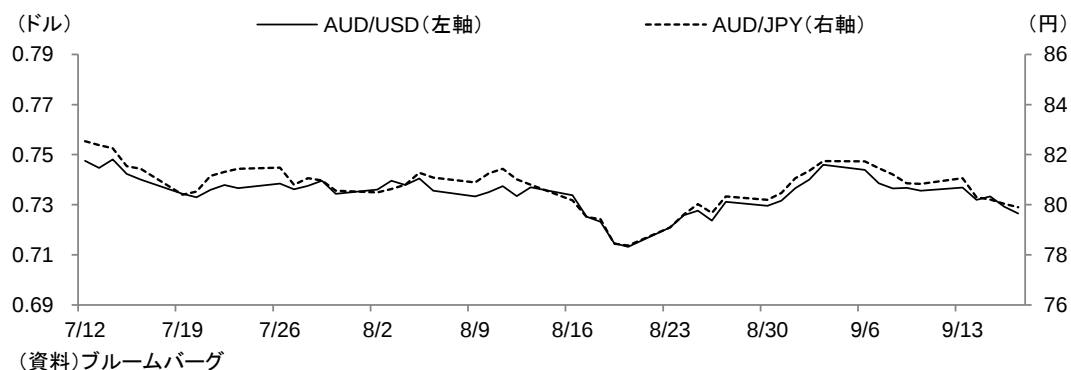
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.72台まで下落。13日は材料難な中、0.73台半ばで小動き。14日、ロウRBA総裁によるハト派的な発言を受けて売りが優勢となり一旦0.7330近辺まで下落。その後、米8月CPIが市場予想を下回ったことを受けて0.7370近辺まで上昇したが、すぐに反落し0.7320近辺で引けた。15日、弱い中国経済指標の発表を受けて売りで反応し一時8月来安値0.7302まで下落。すぐに全値戻しとなったものの、その後は方向感無く0.73台前半でもみ合い。中国8月経済統計は全般的に低迷し、特に小売売上高の伸び率は昨年8月以来1年振り低水準となった。16日、注目された豪8月雇用統計では、雇用者数が予想以上に大きく減少し、労働時間数も大幅低下という結果に。失業率は前月比0.1ポイント低下したが、労働参加率の減少が要因の為、全体的に雇用環境の悪化が示された。この結果を受けて豪ドルは売りが優勢となり0.7320近辺まで下落。NY市場時間に発表された米8月小売売上高や9月フィラデルフィア連銀景況指数が予想外に堅調だったことを受けて、米金利上昇とともに米ドルへの買いが強まると、豪ドルは下落幅を拡大。17日、アジア時間帯は小動きに終始。NY市場時間に入り、ミシガン大学消費者マインドが予想を下振れ、株価が大きく下落すると、米国債利回りが上昇し、米ドルは買いが優勢に。豪ドルは一時0.7262まで下落した。

今週の豪ドルは上値の重い展開を予想する。先週のロウRBA総裁による講演で注目された点は(1) 2024年まで利上げ条件が整うとは想定しておらず、現在市場が22年、23年中に利上げを織り込んでいる状況は理解できない。(2) 実際のインフレ率がインフレターゲット(2~3%)の中央に来るまで利上げしない。(3) 住宅価格上昇を理由に利上げすることはない。(4) Q3GDPは2%以上のマイナス成長、失業率は短期的に5%台後半まで悪化する可能性あり。特に、インフレ率がターゲットの「中央にくるまで」利上げしないとの発言は今回新しく、一部のエコノミストは以前よりも利上げ条件が厳しくなったと解釈している。ロウ総裁のハト派発言が重しとなっている他、今週のFOMCを控えて米金利が上昇する中、今週の豪ドルは上値の重い展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/13~9/17)の値動き: (対ドル) 安値 0.7262 高値 0.7376 終値 0.7263
(対円) 安値 79.75 高値 81.15 終値 79.90



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。